本文を読んでいても一服できるように、所々にコラムが加えられている。このコラムが楽しいもので、「安くておいしいレストランの見つけ方」、「経済的な宿の見つけ方」、更にはクレジットカードの優劣を論じるなど、旅行における有益なアドバイスが豊富で、『地球の歩き方　オランダ・ベルギー編』という旅行ガイドブックの著者ならではのものがある。

著者はパリで釣銭をごまかされ憤慨し、ドイツやギリシャの対日感情の良さ、ハンガリー人の素朴で誠実な国民性に驚いている。

一方、ウィーンでの慇懃無礼な観光業に携わる人々との不愉快な経験をし、オランダ人の計算高さに辟易し、トルコ人は日本語のうまい民族だとたたえている。

著者はこのように各国で様々な体験をし、新たな発見をしているが、それらに対する考察がおのずと文化批評となっている。

ところで、自分は何施設くらい見ているか数えてみたところ、まだ四ヵ国二十二施設であった。こんな便利なものができたのだから、利用しない手はないではないか！　さあこの本を片手にヨーロッパへ行こう。

（今泉　孝）

〔考古堂書院：新潟市古町通四、電話〇二五-二二九-四〇五八、一九九六年、A5判、二四八頁、三五〇〇円〕

杉田暉道・長門谷洋治・平尾真智子・石原明著
系統看護学講座別巻9『看　護　史』

教育カリキュラムにおいては、看護史も医学史も同じ「部屋住み」の身である。それぞれ看護学総論、医学概論という大部屋を間仕切りした一郭に、出番を待つ素振りもあまり見せず、ひっそりとたたずんでいるといった体である。大学の中にポストがなければ、予算はつかず、人材もまた育ちがたいのである。

このような現状は文部行政の浅薄さを意味するものであるが、同時に、それを変えさせる努力を怠ってきた研究者の側にも問題があったといえる。

第一に、研究の多くが現代の社会が抱えているさまざまな矛盾、解決を迫まられている課題といったものに根ざしていないために、医療現場で働く者にとって看護史や医学史が魅力に欠けたものとなっていること。それゆえに、不用不急なものとみなされ、冷遇されることになったのである。

研究者は過去の事実を掘りおこすことにどんな意味があるのか、という問いから出発すべきであり、それがなければ道楽と化すおそれが生じてしまう。

第二に、個別な過去における事象研究や地域研究、あるいは現代社会に生きる人々の行動や思惟、事象といったものを、全体の歴史の流れの中にきちんと位置づける十分な努力を欠いたために、歴史事象が持っている意味の現代性を明らかに

することも、また人や社会の進むべき方向性を示唆することも、残念ながらできずに来たのである。

人や物は他との関係において捉えるとき、そのものの輪郭は明確となる。個別な事象がもつ関係性を明らかにし、それがどのように推移して行ったのか、という点を明らかにすることが、歴史研究にとってもっとも大事なことである。

その意味では、第六版の第一刷となる本書は、まず序章で「看護史の意義」「なぜ看護史を学ぶか」「看護教育における看護史の位置づけ」の項を掲げ、「歴史を学ぶこと」が「現在を学ぶこと」になる点を高らかにうたい上げ、終章では歴史を踏まえた上で、慢性病時代における新しい看護のあり方を模索する姿勢を示していることは、旧版にない新鮮さと看護史の新たな構築に対する意気込みとが感じられる。

細部について検討を加える余裕がないので、旧版との比較で言えば、まず第三章では仏教・儒教・道教・神道の考え方、ケガレの思想や死後についての見方に関する節を新たに登場させている。ターミナルケアや臓器移植の問題に関連して、日本人の生死観・医療観といったものへの理解を深めさせる配慮である。

また、第七章では旧版のアメリカに加えて、現代のイギリス・中国・韓国の看護に関する項が立てられている。他国との比較によって、日本の看護の輪郭が一層明瞭になるとともに、たとえば韓国の看護大学に一九九二年現在で、二十五の修士課程、十一の博士課程があるといった記述などは、われわれの目を隣国にも向かわせ、もっと知りたいという気をおこさせる。

そのほか、巻末の充実した参考文献の一覧も後学に資益するところが大きい。

（新村　拓）

〔医学書院：東京都文京区本郷五―二四―三、電話〇三―三八一七―五六〇〇、一九九六年、B5判、二五四頁、二〇六〇円〕

新村拓著『出産と生殖観の歴史』

著者によるこの本のタイトルをみたときに「これでついに人間の生老病死の全部をテーマにされた」と感じた。著者にはこれまで同じ法政大学出版局から「死と病と看護の社会史」、「老いと看取りの社会史」、「ホスピスと老人介護の歴史」の三冊が出版されており、人間の生まれるところだけがないのはそれだけ取り上げるのがむずかしいからなのかと感じていたところであった。

事実本書を書くにあたって参考としている各章ごとの史・資料をみると苦心のほどがうかがわれる内容となっている。医学史（特に産婦人科学史）はもとより日本史、女性史、宗教史、思想史、技術史、生命倫理、法律、政治、民俗学、文学、人口問題、教育、母性、子供、性などの幅広い知識がないとテーマとして取り上げることのできない領域であることがわかる。人間の出生はこれだけの要素がかかわるくらい複雑で